

■ 100th 甲子園観戦記 ■

8月12日、第100回の記念大会を迎えた甲子園球場前には、炎天下にもかかわらず長蛇の列ができていた。6:45に満員になり、入場券が買えるかどうかわからないのに、大勢が並んでいるという。日曜日とはいえ、高校の大会の2回戦に4万人以上が入る。高校野球とは世界でも稀なるスポーツ文化だ。

球場は趣があり美しい。中に入れば、臨場感に包まれる。陽射しは刺すようだが、時折吹くはま風が心地よい。名物「かちわり氷」などの売り子が声をかけていく。360°見渡せば、アルプススタンドに陣取る応援団のカラフルさをアクセントに1つの絵がつけられている。初めての甲子園観戦は、地元星稜と愛媛代表済美とのカードだった。その試合で甲子園の魔物を見た。

星稜は初回表、5点を先制し優位に立った。4回に先発のエースがふくらはぎの痙攣で降板するアクシデントはあったものの、継投で8回表を終えて、6点差。中盤まではセーフティーリードとは思わないようにしたが、相手の攻撃はあと2回、心にはどこか余裕があった。

選手はきびきびと動き、投球のテンポや攻守の切り替えも早い。応援団は試合前にエールを交換し、一体となって自校の攻撃を後押しする。速球が決まればスタンドはどよめき、快音が響けば歓声が上がる。そして、すばらしいプレーには双方変わりなく拍手が起こる。選手には敬意が払われ、観戦も紳士的である。

魔物は8回裏にゆっくりと目覚めた。追いかける済美の攻撃がつながり、3点差に詰め寄ると、アルプスの応援のボルテージが一段上がる。すると、球場全体が異様な雰囲気になった。この瞬間から魔物は牙を剥き、星稜に襲い掛かる。リリーフに出た4番手投手が、「球場全体が敵に見えた」と語った通り、気が付いてみれば、この回だけで8点を失った。

だが、魔物は一方のチームだけを襲うわけではない。星稜が逆に2点以上を取らなければならなかった9回表に2点返した時も、延長12回裏1死満塁のピンチを2三振でしのいだ時も、タイブレークに突入した13回表の2得点も、魔物は星稜に味方した。

甲子園に棲む魔物の正体は、観客が作り出す球場全体をうねらせるほどのどよめきだ。それは筋書きのないドラマを期待するファンの高校野球愛に外ならない。そして、魔物を覚醒させるのは、決して諦めない高校球児の全力プレーとひたむきさである。

激闘は、13回裏無死満塁、済美の史上初逆転サヨナラ満塁弾で幕を下ろした。スタンドでは誰に言われることもなく観客が立ち上がり、スタンディングオベーションでホームインを迎えた。ナイスゲームだった。愛媛県と石川県の役員が握手で健闘を讃え合っている。3回戦を応援する機会は失ったが、悔しさはない。ここで新たな伝説が生まれたのかもしれないと思った。



猛暑の中の大会運営に批判もある。しかし、甲子園に象徴される高校野球文化は、魔物までもを産み出すファンがいる限り、これからも難題を克服し、進化しながら続いていくに違いない。